

隅田川から清澄通り（高橋）まで

江東区深川江戸資料館

先号から小名木川の歴史や流域の史跡や文化財について特集しています。今回は、西端の隅田川口から上流（東方）に向かって清澄通り（高橋）までの地域について、歴史や史跡を紹介します。

まず、右岸（北岸）の方から見てみましょう。

新大橋とその周辺

新大橋は隅田川に架かる橋としては3番目に古く、元禄6年（1693）に架けられ、当初は現在地より100m程下流の高橋通り（のらくろード）の延長線上にありました。現在地へは、明治45年（1912）に移り、現在の橋に架け替えられたのは昭和52年（1977）です。明治に架けられた橋の一部（中央区側）は、明治村（愛知県）に保存され、ひらがなで書かれた橋名板が、八名川小学校（新大橋2丁目）に保存されています。

新大橋の周辺は、幕府の施設がいくつか設けられ、それにまつわる歴史が残っています。

・御船蔵……隅田川に沿って、橋の北側には幕府の御用船を格納する御船蔵が設けられていました。三代将軍家光が、御船手方の向井将監忠勝に造らせた、全長70mもある巨大な御座船（将軍が乗る船）「安宅丸」もここに繫留されていました。このことから、この付近の地名は、御船蔵前町と呼ばれ、さらに、今の^{（現在のところ）}新大橋1丁目あたりは、明治から昭和にかけて安宅町と呼ばれていました。

・御粉蔵……今、テレビをつければ必ず耳にする言葉「改革！」。江戸後期、幕政の改革を松平定信が行いました。寛政の改革です。この改革の一つで、天災・災害時の窮民救済対策として、粉を保存しておく倉庫＝粉蔵をいくつか建てました。その内の一つが新大橋のたもと深川橋富町に建てられました（寛政7年・1795）。そのため寛政以後の江戸図を見ると、深川橋富町はなく「御粉蔵」と描かれています。

※ここでちょっと寄り道！

☆向井将監忠勝…忠勝の墓は、東京都指定文化財で、深川2丁目の陽岳寺にあります。

☆松平定信…定信の墓は、国指定文化財で、資料館のとなり靈巖寺にあります。

また、「深川海荘」と呼ばれる屋敷が牡丹3、古石場2・3丁目にありました。

「深川海荘」の詳細については、教育委員会発行の^{（はまやし）}下町文化No.214号（2001.7.12発行）をご覧ください。

深川村発祥の地

小名木川の北岸にあたり「深川」と呼ばれる源となった深川村発祥の地が、現在の深川神明宮付近です。ここは、江戸時代初期の慶長年間（1569～1615）に新田開発された所で、開拓者の深川八郎右衛門の姓から名付けられました。

また、八郎右衛門が開基となり、深川神明宮の別当寺として創建された泉養寺がありました（現在は千葉県市川市に移転）。この寺は、元禄6年（1693）

猿江に移りましたが、境内地はかなり広く池もあり、寛政年間（1789～1801）には、池の蓮が牡丹の花のように見事に咲くことから、各地からの参拝客が多く、その様子は、『江戸名所図会』の挿絵に描かれています。



猿江泉養寺の蓮華の様子（『江戸名所図会』挿絵）

猿子橋

猿子橋は、のらくろードの延長線上、かつての新大橋からの通りと交差する、六間堀（小名木川と堅川を結んでいた水路。昭和26年に埋立てられました）に架かっていました。『増訂武江年表』（斎藤月岑著、嘉永3年刊）によると、寛政10年（1798）11月、山崎みき・はる母娘による仇討ちがこの橋の上で行われたことが記されています。

また、この通り（夜店通りともいう）は、浜町方面へ行く近道で、今より道幅が広く、人馬の往来も激しく、たいへんにぎわった通りでした。特に、この猿子橋付近は、商家が建ち並びにぎやかで、一名猿子橋通りとも呼ばれていました。

現在も、通りの一部が少し盛り上がり、橋の跡が確認できます。

万年橋と船番所

隅田川口の小名木川に架かる橋が万年橋です。小名木川に架かる橋は、船舶の通航を妨げないように橋脚が高く造られており、万年橋も同様でした。特にこの橋は、隅田川に面しているところから、富士山も望め、その眺望の良さは広重や北斎の描く錦絵に見ることができます。

架橋年代は不明ですが、延宝8年(1680)の江戸図に、「元番所のはし」と見えるところから、この年には架けられていたことがわかります。

それでは、「元番所」とは何でしょうか。これは、通船改めの番所のことで、陸路の関所と同じく「入鉄砲出女」の取締まりや物資の検査を行いました。小名木川は、江戸への物資輸送の重要な交通路であったところから、橋北詰の隅田川寄りに番所が設けられることになったのです(現常盤1-1付近)。創設の年代は不明ですが、『御府内備考』(江戸の地誌、寛政12年刊)に、正保4年(1647)に2名の者が船番を仰せ付けられたという記載があるところから、この年には設置されていたことがわかります。その後、寛文元年(1661)に小名木川東端の中川口北側(現大島9-1付近)に移され、中川船番所として機能していきます。

芭蕉稲荷と芭蕉庵

万年橋北詰の隅田川寄りに、芭蕉稲荷があります。この付近は、芭蕉翁古池の跡として東京都指定文化財になっています。江戸図を見れば、この辺りは大名屋敷として描かれ、その敷地内に「芭蕉庵ノ古跡庭中二有」との記載があります。現在、この付近(常盤1-6)に芭蕉記念館が建てられています。

また、芭蕉稲荷の奥は、小名木川と隅田川の合流地点で、ここに時間によって向きが変わる芭蕉像のある展望庭園が造られています。眼前にはドイツのケルン市のライン川つり橋をモデルとした清洲橋が望めます。眺めもよく、川風もさわやかで散策には最高の場所となっていますので、隅田川テラスからでもぜひ一度お立ち寄りください。

つぎに、左岸(南岸)に目を移しましょう。

海辺大工町

小名木川南岸の開拓も、江戸初期(慶長年間)に始まっています。ここは、かつて海岸の茅野・沼地であったところを開拓したことから、海辺新田と呼ばれていました。その後、小名木川沿岸が町場となり、船稼ぎの人がふえ、船大工も多く住むようになって海辺大工町と呼ばれるようになりました。

この海辺大工町の人々が奉納した享保12年(1727)の狛犬が、富岡八幡宮参道のほぼ中央の石段両脇にあります。その後も、再興・修復され現在に至っており、南岸最初の開拓地として、強いつながりがあることがわかります。

その後、「海辺」は消えても「大工町」の名称は、江東区が誕生(昭和22年、深川区・城東区が合併)するまで残っていました。

この付近には銚子方面(千葉県)から運ばれてくる物資の船着場があり、また、肥料にする干した鰯



深川稲荷神社(清澄2丁目)

が荷揚げされ、取引される干鰯場(銚子場)がありました。

海辺大工町は、小名木川づたいに広範囲にわたって点々とあり、上町・仲町・高橋組等いろいろ呼び名があったようで、その町中にいくつか稲荷がありました。その内の一つに、間口1間(1.8m)奥行9尺(2.7m)の深川稲荷神社がありました(現清澄2丁目)。ここの布袋尊は、深川七福神の一つになっています。

清洲橋通り周辺の文化財

通り沿いにある臨川寺は、鹿島根本寺(茨城県)の仏頂禪師が滞在中、松尾芭蕉はここで禅の修業をしました。その関係で臨川寺には俳句に関する文化財が残っています。美濃派の俳人、神谷玄武坊の碑や、芭蕉由緒の碑、墨直しの碑が残されています。

臨川寺の南側の本誓寺には、東京都指定文化財の「村田春海墓」があります。村田春海は、江戸中期の国文学者で賀茂真淵に師事し、和歌・雅文・書に優れ、とくに仮名遣いの研究に造詣が深かった人物です。また、少し変わった石造物として、「石造迦楼羅立像」があります。迦楼羅とは、仏教の想像上の鳥で、とくに密教では、梵天などの神々が衆生(すべての生物)を救うために化身したものとされています。

本誓寺の隣の常照院には、賀茂真淵の弟子で、「懸門三才女」の一人である油谷倭文子の墓碑があります。碑文の撰および書は、賀茂真淵のもので、

さらに南へ目を向けると、江戸時代からの大名庭園で、財閥岩崎家の別邸だった都立清澄庭園があります。



「石造迦楼羅立像」(本誓寺・清澄3丁目)